

第3章. 2001年9月11日 9.11 同時多発テロ発生！

2001年9月11日のワシントンDCは天気の良い日だった。その日は息子が通う現地の高校の先生と朝7時から面談があり、遅れないようにと家内と一緒に早めに家を出た。息子が眠そうに授業を聞いていることがあるので、夜はゲームなどを切り上げて早く寝るよう指導してください、と先生から注意された。1時間弱の面談が終わり、車で支局に向かった。通勤の時にいつもかけているラジオ番組を聞くともなく聞いていると、キャスターが流している音楽を中断して「いま入ってきたニュースです。NYのワールド・トレード・センターに観光用のヘリカセスナが接触したようです。けが人がいなければいいのですが。続報があればまたお伝えします。チャンネルはそのままに」と言い終えると再び音楽を流し始めた。それからしばらくしてキャスターの声は絶叫に変わっていた。「もう一機がビルに突っ込んだ。これは事故じゃない。テロだ！」。アメリカの長い日の始まりだった。

私の勤める日経新聞のワシントン支局のあるビルは、小さな公園を挟んでホワイトハウスの真向かいに建っている。すでに道路は大渋滞となっており、すぐに全く進まなくなってしまった。家内に運転を代わってもらい、走って支局に向かった。途中、目にしたのはこれまで一度も見たことのないDCの姿だった。信号は全て赤点滅に変わり、主要な交差点はDC警察に代わって軍のMPが取り仕切っていた。それぞれの交差点近くには軍用のハンビー（ジープを平たくしたような形の車）が止まっており、荷台には銃口のキャップをはずし、いつでも撃てるようにした20ミリ機関砲が置かれていた。アメリカ全土が事実上の戒厳令下に置かれていた。

支局に着くとまず各記者が持っている情報を報告してもらい、書くべき原稿と内容を確認した。この日、日本の新聞は朝刊の締め切りを解除していたが、出稿が遅くなれば新聞を届けられる地域が限られてしまうので急ぐ必要があった。1分1秒を争って原稿を書いていると、ビルのセキュリティー担当者がオフィスに来て「直ちにビルから退去して欲しい」と強い口調で求めた。セキュリティー上、ホワイトハウスの真向かいのビルから出て欲しいとの求めはもっともなものだった。しかし、ニュースを日本の読者に伝えなければならず、原稿を書いたらすぐに退去するのでもう少し支局に居たいと伝え、何とか納得してもらった。最後の一本を送り終わった後、「これから支局を出ます。いったん出たら連絡は取れないし、支局にもしばらくは戻れないと思います」と東京本社に伝えてから外に出た。案の定、支局から出ると携帯電話はつながらず、ビルの周囲にはポリスラインが張り巡らされ、立ち入り禁止になった。その後、支局に戻れたのは3日後のことだった。戻るまでは市内のいくつかのホテルを前線基地として転々と移動するしかなかった。

空を見上げると、ジェット戦闘機が描いた幾筋もの飛行機雲が走っていた。その日からほぼ1年間、空を網の目のように切り取った飛行機雲を毎日、見ることになる。1年の長期にわたり、毎日、空一面に飛行機雲を書くのは膨大なジェット燃料が必要なうえ、パイロットの疲労も相当なものになる。それでも続けたのは飛行機雲を描き続けることで、地上にいるかもしれないテロリストたちに「毎日、空から監視している」というプレッシャー与えるのが目的だったからだ。約1年経ったある日、飛行機雲は何の前触れもなくきれいに消え去っていた。それまでと違う「普通の青空」に戻ったことにかえって違和感を覚えたのだった。